

## 江戸時代の教育空間に関する研究

### ～東日本の藩校建築をとおして～

#### A study on the educational space of the Edo period

#### A Case Study of the “HANKO” construction of East Japan

○大庭矩文<sup>1</sup>， 落合正行<sup>2</sup>， 山中新太郎<sup>3</sup>

Norifumi Oba<sup>1</sup>， Masayuki Ochiai<sup>2</sup>， Shintaro Yamanaka<sup>3</sup>

### 1. 研究の背景と目的

全国で公立小中学校の統廃合による再編で新たな学校名として、過去にその地域に存在した藩校の名前をつける例が見られるようになった。これは人々がどこかで現代の教育の進むべき方向を過去に求める動きとも捉える事が出来るのではないか。改正教育基本法(2006)により、道德教育という一つの柱が立ち上がった現在、道德教育に力が入れられた時代を振り返るべきだろう。そこに現代の教育空間に関する建築的難題を解くカギが隠されているのではないだろうか。

道德心を養うといった教育の方向性に見合った教育空間を模索する現在、道德教育が盛んに行われた江戸期の教育空間に目を向ける事が必要なのではないだろうか。本研究は当時の官営の公的教育機関であった藩校を中心にその空間を探る事で、如何なる教育空間が日本のオリジナルなものとして定義できるのか、またそこから現代に繋がる一筋の流れを明らかにしていく事を目的とし、将来の学校建築の新たな展望を切り開く契機となる事を期待する。

### 2. 既往研究と本研究の視座

江戸時代の教育機関は寺子屋、私塾、藩校に分けられる。その中で、官主導であった点と学校の為に建設された校舎を利用した点から、現在の学校建築の系譜上にあると考えられる藩校建築を研究対象に定める。

藩校に関する学術的研究は主に教育学の側面から教育史や教育方法論などの見地でなされたものが大半であり、建築学の立場からのアプローチは非常に少ない。城戸久が 1945 年に「藩学建築」で建築史学の立場から藩校建築を概観するが、その全貌のわずかな輪郭を現すにとどまっている。建築学の立場での研究

は建築史学からの側面が強く、建築計画学的に藩校建築を検証した研究はほとんどみあたらない。

本研究はこれまで建築史学の立場から明らかにされてきた、藩校建築を概観する作業を前進させるとともに、今まで明らかにされなかった建築計画的な評価を与え、特筆すべき空間的特徴を明らかにする。

### 3. 藩校の概要

#### (1) 江戸時代の教育機関

江戸時代の教育機関は運営主体によって分けられる。下図のように民間主導の私塾や寺子屋に対して藩校は藩が直接運営権を握る行政主導の教育機関であった。郷学はこの両者の中間に位置づけられる。生徒の身分も異なり一部例外はあるものの、概して藩校は武士の子弟、私塾や寺子屋は町人や農民の子弟が通う場であった。

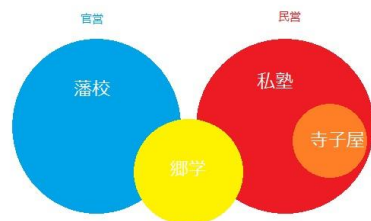


Fig1.江戸時代の学校の運営主体関係

Table1.教育機関の概要一覧

表1. 教育機関概要一覧		私塾	藩校	郷学
別名	寺子屋	私塾	藩校	郷学
教師の身分	寺子屋指所、手紙指所が中心	武士および優秀な民間人	武士	藩校
教育者の身分	町人(僧侶・神官・医者・商人・農民)	武士が中心	武士が中心(例外として町人の入学も認められる場合もあった)	藩校
教育者の年齢	住民	武士が中心	武士が中心(例外として町人の入学も認められる場合もあった)	藩校
教育者の年齢	5歳～10代	10代～20代	7歳～20代	藩校
教育内容	読み・書き・そろばん。実生活に必要な知識や技術の習得	漢学、東洋医学、西洋医学、蘭学、兵法、和算、天文学、書道、音楽など	文武兼備(習字・素読・武芸) 医学、洋学校、蘭学校など専門学校もあった	藩校
運営	民営	民営	官営(各藩)	藩校
教育者数(1校あたり)	10～100人	～80人	数十人～数百人	藩校
時代	江戸～明治～	江戸～明治～	江戸～明治(学生公布前)	藩校
起源	中世の寺院での教育	?	1689年岡山藩、岡山学校が初	藩校
人間関係	教育者は「筆子」と呼ばれ、彼らにとって師匠は一生の師であるケースが多かった	師を慕う心と共に、門下生同士の切磋琢磨による横のつながりの強さが見られた	基本的に武家の子弟が学んだ。武家同士の横のつながり	藩校
学習形態	基本的に個別指導	教師による集団授業から個別指導、先輩による後輩の指導など多岐にわたる	教師による集団授業(教科によって様々な教師が指導)	藩校
特徴と歴史的意義	庶民の識字率や基礎学力の向上、社会における学問の必要性を広めた	藩主の人間性と教育者の自覚性を基盤として発展した。権威などで活躍する国家の人材育成に成功した	藩主の藩士が師範の教育の為に設立した学校。官によるエリート教育の萌芽	藩校
代表的な機関	—	適塾(緒方洪庵)、松下村塾(吉田松陰)、成宜園(広瀬淡窓)、鳴滝塾(沖田良)	日新館(金津藩)、弘道館(水戸藩)、明倫館(長州藩)	藩校
その他	—	漢学の場であったのと同様に理学の場でもあった	各藩につき、一つの藩校を持っていた	藩校
場所	町内、村内、寺、地蔵	町内、村内	城下町	藩校
建築空間	民家や商家を間借り	民家や商家を間借り、先生の自宅	専用校舎	藩校

(2) 藩校のシステム

藩校とは江戸時代に藩士の子弟の教育を目的として設けられた公的教育機関である。藩校の運営資金は藩主の出資、藩校付属の田畑の収益、藩士からの教育税、などで賄われた。事務方は藩の重臣が学校奉行となり、組織された。

生徒は8歳～20歳程度の藩士の子弟で、全体義務、長男義務、志願者などで構成された。通学は自宅からの他に、寮からの通学する者もいた。

指導者は藩に仕えた儒臣、外から招かれた儒者、民間から招聘された儒者などである。教師は儒官、藩儒、藩校教授などと呼ばれた。

教育カリキュラムは文武両道を掲げる藩校が多く、学問と同時に武術も学ばれた。学問は漢学(朱子学)、「四書」「五経」等を中心に学んだ。また、医学、歴史、言語、算術、洋学、軍事学等の専門科目を学ぶ場合もあった。武芸は剣、柔、射、槍、薙刀、馬、砲などを学んだ。時間割は午前、午後など現代ほど細かく分けられていないが、課業日割りといった資料が残され、その存在が確認されている。

(3) 藩校の歴史

Fig2.年代別藩校創設数より、寛政異学の禁の発令や昌平坂学問所が開設された1790年頃の創設数が大きく伸びている事がわかる。また、1851年以降もペリー来航に対する影響か、急激に多くの藩校が設立されている事がわかる。

Fig3.地域別藩校創設平均年より、中国・四国地方が最も早く、続いて九州・沖縄、北海道・東北の順となっている。三つの地域は江戸から離れ、多くが外様大名の藩であった。ここから、学問で力を蓄え中央に負けない国力を身につける潮流が伺える。

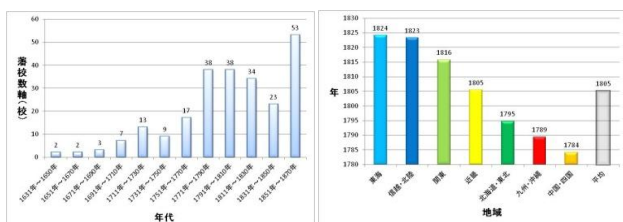


Fig2.年代別藩校創設数 Fig3.地域別藩校創設平均年

(4) 藩校の現状

1871年の廃藩置県で全ての藩校は閉校し、その後

は主に旧制の小学校として使われたが、老朽化や戦火によってほとんどの藩校建築は姿を消した。現在、門や、一部校舎などが残る藩校が全国で数十校残るものの、当時の姿をとどめているのは松代藩文武学校の一校のみとなっている。校舎の一部が残る水戸の弘道館は公園を併設し歴史観光地として運営され保存・活用される礼がある一方で、その存在が明らかであるはずの藩校でも保存対象とされず、存在が消えさりつつある藩校もある。

4. 調査及び考察

(1) 教室形式に関する調査

藩校の教育内容に対して教室形式(武術教育空間も含む)が如何に展開されていたかを調査する事で、藩校の教育方法と空間の関係性を明らかにしていく。

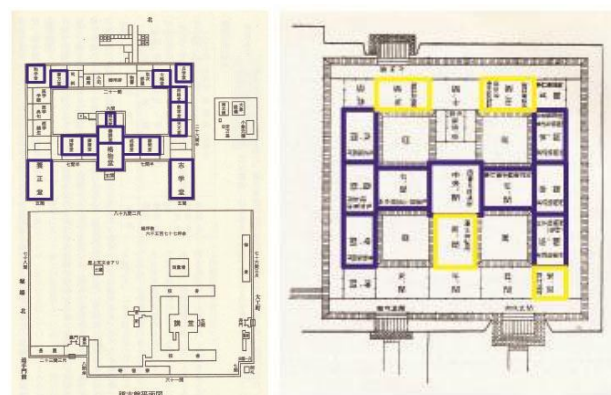


Fig4.弘前藩稽古館平面図 Fig5.仙台藩養賢堂平面図  
○教科教室型

稽古館、養賢館は教科教室型の教室形式がとられている、現在の日本で一般的な特別教室型とは異なるこの形式が採用されている。

5. 研究の展望

藩校建築に採光、換気量、教室における生徒一人当たりの面積など建築計画的の評価を与える事で、その空間の持つ特質を明らかにする。また、配置計画がどのような方法で計画されたのか風水との関係を通じ調査する。

6. 参考文献

城戸久「藩学建築」1945

等